



対談

逆境からのチャレンジ 夢を持ち そして一歩踏み出す

夢を持つこと、一歩踏み出すことの大切さを語る東京大学法学部の蒲島郁夫教授。教授の経歴は異色である。農業研修生としてアメリカで研修するうちに学ぶことの楽しさに目覚めた氏は、ネブラスカ大学農学部で学び、続いてハーバード大学大学院で政治学を学ぶ。紆余曲折を経て夢を実現した氏に、ご自身の半生や教育への思いを伺った。

聞き手
株式会社インテックホールディングス
取締役会長兼社長

中尾 哲雄



東京大学法学部 教授
蒲島 郁夫氏



東京大学法学部 教授 蒲島郁夫氏(かばい・いくお)
1947年 熊本県生まれ。県立鹿本高校卒業後、農協に勤務。68年農業研修生として渡米、71年ネブラスカ大学農学部に入學、74年卒業、75年同大学院修士課程を修了し、ハーバード大学院博士課程入學、79年同大学政治経済学博士号取得、80年筑波大学社会学系講師、85年ワシントン大学客員准教授、85年プリンストン大学国際関係研究所客員研究員、筑波大学社会学系助教授、教授を経て、97年東京大学法学部教授、現在に至る。

農協職員から 東大法学部教授へ

中尾 先生は東京大学政治学の教授でいらっしゃいますが、それにしてもしュツクなご経歴ですね。熊本の高校を卒業後、農協に勤務、農業研修生として渡米、ネブラスカ大学農学部で繁殖生理学を学ばれた後、ハーバードで政治学を勉強された。

蒲島 東大法学部の教授になられたとき、読売新聞の社会面に5段抜きの記事ができました。見出しは「農協職員から東大法学部教授へ」、精子から政治へ。よほどシュツクだったのでは

しゅつね。でもよく東大法学部が私を呼んだと思いますよ。

中尾 長くおつきあいをいただき、いろいろ教えていただきましたが、先生と私の共通点は農家に育ったことだけと気づきました。

蒲島 中尾さんとの共通点は農家に育ったこと、戦後の飢えの苦しみを知っていることでしょうか。家族は満州から熊本に引き上げたのですが、2反ちよつこの小さな農家で9人子どもがいたものですから本当に貧乏でした。中尾さんのような富農ではなく小作でしたから。

中尾 私も貧しかったですね。戦後、

蒲島 そのとき勉強しようと思ったのは、子ども頃の貧乏生活やアメリカでの暗い農場生活があったからこそでした。

中尾 そのモチベーションは理解できません。私も英語をかなり勉強しましたが、それは農家の長男から抜けるためには勉強しかなかったので、思ったからです。この辺が先生と違って不純なモチベーションでした。

蒲島 昔の農家は大変でしたからね。川口文夫中部電力会長も農業から抜け出すために一生懸命に勉強したとおっしゃっていました。

中尾 その苦しさはバネになったこととは間違いですね。でも、やはり夢が人を輝かせ、希望が人を大きく

するのだと信じています。

柔軟なアメリカの大学教育

中尾 研修終了後、一旦帰国されて牛乳配達で旅費を貯めて片道切符で再度アメリカに渡られた。

蒲島 ネブラスカ大学に着いたときには所持金50ドルでした。通訳をしながらSAT(アメリカの大学入試共通試験)の勉強をしたのですが不合格。ところが、通訳を務めていた肉牛コトスの担当講師が入試担当官に直談判してくれて仮入学できました。

中尾 そこでオールAをとって特待生になり、奨学金も貰われる。

蒲島 25歳で大学に入ったのですが、



父の郷里に帰ったのですが、家族が14人と多く食べ物がないで大変でした。先生は著書「運命」の中で、夢を持って努力したとおっしゃっていますが、やはり先天的な才能を持っているのではないのでしょうか。正直に言うてくれないませんか。

蒲島 いえ、小学校の成績表では5を1個しかもらっていないのですよ。それも読書感想文が良かったということで、6年生の3学期の国語が5だったのです。

中尾 信じられませんか。私は5ばかりでしたが、その後まったく駄目人生。

蒲島 知能テストもいっぽうではありませんでした。天才は別として、人間の才能はあまり変わらないのではないのでしょうか。それよりも、きうかけやモチベーション、そして夢が重要だと思っています。

子どもの頃からGINOの夢

中尾 どんな夢をお持ちだったのですか？

蒲島 夢は三つありました。一つ目は本を読むのが好きだったので小説家、次に政治家、三つ目は阿蘇山の麓に牧場を開く夢です。この三つ目の夢を実現するためにアメリカへの農業

研修生に応募したのです。

中尾 農業も政治も最初の夢だったわけですね。普通は夢という思い巡らしているだけでなかなか実現しません。

蒲島 一歩踏み出すことが重要なのです。牧場を開くためには知識がいる。だからアメリカの牧場で学びたい。でも、普通は思うだけでしよう。一歩踏み出して試験を受けて研修生になる人は少ない。あの時、踏み出したことがよかったです。

中尾 アメリカでの研修生活はいかがでしたか？アイダホの広大な農場で夜明け前から日が落ちるまで、ブリザードと呼ばれる雪風の冬も毎日作業をされたとか。

蒲島 アメリカの牧場では研修生としても安い労働力ですから、本当に大変でした。あまり疲れると不平不満を言う気力もなくなるのですよ。帰国の半年前にネブラスカ大学で3カ月間の学科研修がありました。このとき初めて勉強というものをしたのですが、肉休労働に比べたら学問はなんと楽なのかと思いました。

中尾 勉強は大変といわれますが、ある意味、机に座って好きな勉強をするのなんて楽なのかもしれません。

すく成果が上がりました。高校でさほど勉強しなくても大学で基礎から教える、というアメリカの教育制度が私にはよかったです。

中尾 その後、政治学に進まれるわけですが、農学部で立派に成績をあげられたのに、今度は政治というその踏み出しは理解できないのですよ。

蒲島 一学期間をみると考えたときに、一番目の夢だった「政治家」転じて「政治を勉強したい」という思いが湧いてきたのです。政治は好きになると最後まで好きなもの。農学部での実績で自信が出たのでしゅつ。それがハーバードの入試担当教授の心に響いたのかな。

中尾 簡単そうにおっしゃるけれど、何度お聞きしても信じられませんね。やはり「変人」かな。

蒲島 全く政治を勉強していないのに、よく奨学金をつけて大学院に入れてくれたと、あの弾力性には今でも感銘を受けます。農学部の指導教授は研究室に残そうと思っていましたから、いい気持ちにはなかつたでしょうが立派な推薦状を書いてくれました。

中尾 政治学の分野で農業の経験は少しは役に立ちましたか？
蒲島 当時、日本の政治学者はすべて自民党の政策は間違っていると

していました。でも私はアメリカにいて自民党政治を客観的に評価することができた。自民党政治のいいところは、経済発展を進めながら農村部に所得の分配をしたことです。だから、民主化を進めながら、発展と平等を両方とも達成し、安定した国をつくることのできたのです。なかなかできないことですよ。

中尾 この自民党の伝統的な路線、発展と平等の路線を効率化の方向に向けた。それが参院選の結果、そして今の政治の状況を招いたともいえるかもしれません。

蒲島 もう一つは、当時の日本の政治学者は農家を非リットととらえ、彼等の政治参加を歓迎しませんでした。でも、経験からそうではないと実感していましたので、農家の政治参加がどう政治発展に響くかを研究しました。これは有名なサミュエル・ハンチントンの理論に対する批判でもあったわけです。ハンチントンは民主化と発展、平等は両立しないという意見ですが、私はうまくいくのではないかと論じたのです。それはやはり農家の経験があったからですね。

中尾 ハンチントンはリアリズムを基調とした保守的な思想で知られる国際政治学の世界的権威。文明の



衝突」を読みましたが、あんな偉い方と英語で難しいことを議論する、すごいな。それにしてもハンチントン は腹の大きい人ですね。若造に言われたら力不足ときますが。

蒲島 とても偉大な政治学者でもし政治学にノーベル賞があれば、彼が最初にもらう人でしょう。授業は とても厳しく、つまらないことを発表すると3分でストップさせられるのですが、自分が持っていない理論や知識を話すとても歓迎しました。私の論文を雑誌に発表しなさいと言ってくれたのも彼です。

中尾 ライシャワーにもお会いになったのでしょつ。

蒲島 研究室が隣だったのです。優

しい人でもよく面倒を見てくれました。三年目以降の奨学金も彼がいなくなったら買えなかつたかも。アメリカの奨学金の出し方は素晴らしいのです。事務的ではなく、出すと決めたら即座に出す。博士号をとって帰国する時には、研究所の事務局長が、頑張ったからハワイに寄って行ってはと家族の分まで旅費を出してくれました。アメリカに10年いて、初めて遊びの旅をしたものですから、今でも鮮明に喜びとして残っています。

教育方針は「生きた証を残せ」

中尾 先生はとても楽しそうに勉強をされていますね。随分変わった教授が日本にも出たわけですが、今の学生と向き合われていかがですか。

蒲島 ある先生が最近のゼミは面白くないというのです。学生はやる気もなければ、コソパではお酒も飲まないし冷ややかだと。でも私のゼミはものすごく熱気がありますよ。コソパではみんな大騒ぎしますし、卒業生が集まってゼミ総会も開いてくれます。最初は東大生を傲慢かなと予想していたけれど、実は優しく、私はとてもゼミ生を愛しています。ゼミの旅行で飲みすぎて風呂場の階

段で転んで顔を打ってそのまま寝てしまったことがありました。朝起きてみたらゼミ長が徹夜で冷たいタオルを顔に当ててくれていたのです。そういう優しさに出会ってとても嬉しく思いました。

中尾 私と飲んで寝てしまわれたこともありましたね。

蒲島 教育はどうモチベーションを与えるかです。私の教育方針はとにかく、東大生として生きた証を残せ」ということ。そのためゼミでは研究成果を本にまとめさせています。100年後に残るような本を目標に、徹底的に資料収集をします。例えば第一期のゼミは「新党全記録（1999年、木鐸社）」を出しました。3巻で1200ページです。

中尾 「生きた証」、胸に響きます。今となつては当時の新党のことを知りたかつたら、この本以外に資料はないわけですね。

蒲島 もう一つは「参加」です。優秀な学生も、そうでない学生もとにかく参加させて、モチベーションを高めています。

中尾 今後、どういつ人材を育てたいとお思いですか？

蒲島 まずは優しさでしょつか。東大生はすでに能力はありますから

彼らに必要なのは他者への優しさです。ゼミは共同作業でできる人ができない人を必死で支えます。また、一冊の本をつくりあげること、知識と違つても、つくりがいかに変かといつことを理解します。学問を通してこれができるのが、ゼミのいいところではしょつね。

中尾 本もものづくりですね。また、エリート層にこそやさしさがほしい。

蒲島 エリート層は概して自分勝手です。また、自信がない人ほどそうです。本当に自信のある人は優しいですよ。中尾さんと初めて会つたときから気が合いましたが、あなたにも優しさがありますね。

中尾 やさしさは自信に裏つづられたものなのですね。

能力は多次元なもの

中尾 日本の教育システムにアドバイスをいただけますか。

蒲島 能力は人格的な優しさや鋭い勘など多次元なもの。それを大学入試は一回の知識レベルで評価しようとする。ここに問題がある。私がハバードに入れたのは、政治学の知識はないが、貧乏生活で子供を育てながら農学部で頑張つた、そのバイタリティが評価されたと思うのです。

入れます。高校では運動など勉強以外に没頭しても、大学で本当に好きなことを見つけて勉強できるいい時代です。この機会を親も子も生かしていません。

中尾 母校の卒業式で、学長が4年間学んだことを生かして社会で活躍してくださいと祝辞を述べた時、私は同窓会長として、学ばなかつた者に生かすものはないと祝辞らしくない挨拶をしました。大学が好きな

ものを見ける場になればいいですね。

蒲島 大学は全入ですから、今後しなければいけないのは大学院の改革です。大学はどこでもいいが、大学院だけは競争に勝ち抜いた人が集まるようにする。それが研究の将来を決めるのです。大学では本心に好きなことを見つめる。18歳で見つかるはずはない。私も大学で見つけて28歳の時に大学院に入り、32歳で卒業。それでもキヤッチアップできますから。

期待がだんだん高まる 最後は自分との戦い

蒲島 大学で成績がよかつたのは勉強が好きだからだけではないのですよ。子どもが3人いましたから、自分が頑張つて奨学金をもらわないと飢え死にするわけです。好き嫌いだけではありません。

中尾 貧しさからはいあがろつとした、最初のモチベーションと若干似ています。「豊かさ」をみんなが求めてきました。でもやはり「貧しさ」もある意味で重要なかもしれませんね。

蒲島 火事場の馬鹿力ではないですが、そつという状況に追い込むことも人生には必要なのかもしれません

中尾 それを力にできるかどつかがそれも個人の力でしょうが、さて、先生がおひやる、above the expectation（期待値を超える）についてお話しただけませんか。

蒲島 私は最初から東大法学部教授になつたわけではありません。まず農協、それから農業研修生、ネプラスカ大学、ハバード大学、筑波大学、そして東大と、舞台がいくつもあつたわけです。はじめの方の舞台を見ている人は5、6人ですが、まずはその人たちの期待値を超えることが重要で、それをちよつと超えると次の舞台が用意されている。それが自分

の夢につながる。いかに期待を裏切らないかが一番大切で、その繰り返しだと思つのです。ただ問題は期待がだんだん高まると苦しみにもなるのです。そして最後は誰かとの競争ではなく、自分との戦いになる。中尾さんも会長になられて後は自分との戦いで経営道の世界だと思つのです。

中尾 経営者といつ夢は達成しましたが、目標としていた経営者像には程遠いですね。

蒲島 満足してしまつたら人生は楽しくありません。私も「運命」といふ本を書いて、専門以外の書き物に足を踏み込みました。一つ目の夢だった「小説家」の夢をあきらめたわけではないともいえますね。

中尾 お互いに本気で小説を書いてみませんか。

蒲島 専門外のことを書くのもいいものです。ひとりの人生としては特異な経験をしましたし。

中尾 今後がさらに楽しみです。今日は勇気が出るお話をありがとうございました。わざわざ富山に来てくださったのですから、久しぶりに一杯やりましょう。

中尾 ペーパーの試験より、会話の中から人間性を見る。いまはこの会社もそつしていると思います。

蒲島 ただ、試験のプランを二つ言つと、東大の法学部の学生は課題を与えると、途中であきらめずに徹底的にやるわけです。その継続の力が合格の原動力なかもしれません。

中尾 根気よく続けることは、やはり一つの能力ですね。では、日本の大学、入つた後のシステムはどうでしょう。

蒲島 日本の大学生は受験勉強で入学時にすでに疲れています。ここからは選ばなければ必ず大学に

入れます。高校では運動など勉強以外に没頭しても、大学で本当に好きなことを見つけて勉強できるいい時代です。この機会を親も子も生かしていません。

中尾 母校の卒業式で、学長が4年間学んだことを生かして社会で活躍してくださいと祝辞を述べた時、私は同窓会長として、学ばなかつた者に生かすものはないと祝辞らしくない挨拶をしました。大学が好きな

ものを見ける場になればいいですね。

蒲島 大学は全入ですから、今後しなければいけないのは大学院の改革です。大学はどこでもいいが、大学院だけは競争に勝ち抜いた人が集まるようにする。それが研究の将来を決めるのです。大学では本心に好きなことを見つめる。18歳で見つかるはずはない。私も大学で見つけて28歳の時に大学院に入り、32歳で卒業。それでもキヤッチアップできますから。

彼らに必要なのは他者への優しさです。ゼミは共同作業でできる人ができない人を必死で支えます。また、一冊の本をつくりあげること、知識と違つても、つくりがいかに変かといつことを理解します。学問を通してこれができるのが、ゼミのいいところではしょつね。

中尾 本もものづくりですね。また、エリート層にこそやさしさがほしい。

蒲島 エリート層は概して自分勝手です。また、自信がない人ほどそうです。本当に自信のある人は優しいですよ。中尾さんと初めて会つたときから気が合いましたが、あなたにも優しさがありますね。

中尾 やさしさは自信に裏つづられたものなのですね。

（この後、自民党と民主党の今後について大胆な予測が続きましたが、ここでは省略させていただきます）